Title	『三田社会学』創刊20年に寄せて
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『三田社会学』創刊 20 年に寄せて

有末 賢

三田社会学会の機関誌『三田社会学』が創刊 20 年、第 20 号の刊行を迎えた。創刊は 1996 年夏、山岸健（第 3 期三田社会学会会長）会長時代である。私は当時、竹村英樹さんとともに、三田社会学会事務局を担っていて、編集委員会は、山岸会長自らが編集委員長、小川浩一先生、永田えり子先生、草柳千早先生が編集委員であった。創刊号の特集は、永田先生の担当で、「社会学はいま、何をなすべきか」という課題に対して、清原慶子先生、松本三和夫先生、渡辺秀樹先生、藤田弘夫先生、吉原直樹先生、川合隆男先生などそうそうたるメンバーが論じている。投稿論文も、澤井敦先生や私などまだ若かった研究者が「死の社会学」や「ライフヒストリーにおける記憶と時間」を投稿して掲載されている。

三田社会学会自体の創立は、1985 年 12 月である。今年で創立 30 周年を迎えることになる。私は、当時、英国エセックス大学社会学部に留学中で、創立大会には欠席している。川合先生や関根政美先生から伺ったところでは、第 1 期会長は十時巖周先生で、川合先生、明治学院大学の山中一郎先生、原田勝弘先生などで日本社会学会理事に十時先生を押し立てようという動きの中で、三田社会学会が創設されたいが、当事者の十時先生は、日本社会学会理事には関心を示さず、その後、三田社会学会の活動は、「中だるみ」の状態に陥っていた。第 2 期会長は、外部の山中一郎先生に何とかお願いをして、総会、大会など形だけは開いたが、三田の社会学が盛り上がるということはまだなかった。山岸先生は、『三田社会学』という学会誌を創刊して、何とか三田社会学会を盛り上げようと努力され、ようやく 10 年目にこの『三田社会学』が創刊されたわけである。その後は、川合隆男先生、青池慎一先生、藤田弘夫先生、渡辺秀樹先生、鈴木正崇先生、関根政美先生など歴代の会長や内部の社会学、文化人類学、社会史、民俗学、マス・コミュニケーション論など幅広い研究者・院生たちに支えられて、ここまで継続されてきた。

特に、2013 年 10 月に三田で開催された第 86 回日本社会学会大会は、渡辺秀樹先生、浜日出夫先生を代表として鹿又伸夫先生、岡田あおい先生、岡原正幸先生、塩原良和先生など多くの先生方の大活躍によって、成功裏に終了することができた。長い、慶應義塾大学社会学の歴史の中でも、これは特筆に値すべきことである。かつては三田の山は、仲違い、喧嘩ばかりと言われてきたが、『三田社会学』の刊行以来、この結束は見事であると「自画自賛」であるが、ぜひ、後輩に受け継いでいただきたいので、あえて言わせてもらう。これからも『三田社会学』

を刊行し続けていくためには、院生・OD、研究者たちの投稿原稿が頼みである。さらに、幹事などの先生方の毎年のシンポジウム、特集の企画も重要である。創刊号の「社会学はいま、何をなすべきか」を原点としてこれからも、進んでいきたいと思う。

(ありすえ けん 慶應義塾大学法学部 三田社会学会第 10 期会長)